

ワイナハ協会議長 アフメード・ムラードフ

カザフスタン諸民族会議チェチェン・イングーシ民族文化振興協会“ワイナハ” アルマトゥ、民族友好会館別館 2004.06.01.午前
聞き手：姜 信子 翻訳：岡田一男

チェチェン紛争についての貴方の見解を先ず聞かせてください。

ロシアとチェチェニアの間の戦争は、もう 400 年間続いています。これは、ボリス・ニコラエビッチ（ロシアのエリツィン大統領）も指摘していたことです。彼は、これまでロシアとチェチェニアの間では、400 年間戦争が続いてきた。しかし、これからは平和な時代がやって来るのだと語りましたが、ロシアの政治家の言葉の常で、そうとはなりませんでした。

チェチェン戦争に勝利というものはありえないでしょう。チェチェニアがロシアに勝つということではできませんし、一方、ロシアもチェチェニアを完全に滅亡させるということは不可能だからです。私はチェチェン人にも、ほかの民族と同様の権利、自らの国家を持つ権利があると確信しています。それは、この世界に存在する他の国家と同じようなレベルの国家であるべきとも考えています。ただ、そこで問題になるのは、その国家とロシアとの関係です。ここで言いたいのは、チェチェン人もその国家も、かつて（ロシア以外の）他の国家と戦争をしたことは無いという事実です。

いつか必ずチェチェン人は独立を達成し、自らの国家を持つことになるだろうと私は確信しています。でも、それが何時になることが... 私自身は、チェチェニアはロシア自体よりももっと前から自分の国家を築く権利を持っていたと思うのです。チェチェン人の社会というのは、もともと大変民主的なものなのです。チェチェン人は全ての人間が平等です。むしろ貧富の差というものは存在しますが、チェチェン男性の社会的地位は、貧富の差によって左右されるものではありません。奴隷もいなければ主人もないのです。これは、ロシアとの関係にもあてはまり、それが 400 年つづく戦争となっている訳です。

一方、ロシアは、ほかの民族ともいろいろ問題を抱えてきました。ポーランド、フィンランド、中央アジアの国々、ここカザフスタンをはじめ、キルギス、ウズベキスタンなどや、コーカサス諸共和国など、ロシア帝国は後にソ連を構成した全ての諸民族と紛争を重ねてきました。ここで強調しておきたいのは、チェチェン人が署名したロシア帝国やソビエト連邦に参加するといった条約や文書というものは存在しないということです。これが、ロシアとチェチェニアの間の対立の背景です。

しかし、私たちはいずれ戦争は終結すると信じています。それをどういう風に終結させるべきかという提案も作成しています。それは国連をはじめ欧米各国にも送られて、検討もされていますが、何よりも先ず、ロシアはマスハードフ氏との交渉の席に着かねばならない。そして交渉の中で懸案の問題は解決すべきであるというものです。そういう交渉は既になされた経験があるわけで、問題は交渉で解決するという意思があるのかどうかということが問題なのです。

特にプーチン大統領自身にです。かつてエリツィン大統領、ボリス・ニコラエビッチは、日本に対して、第二次世界大戦時、ソ連の政策によって日本人に犠牲が出たことに遺憾の意を表したかと思います。彼は、チェチェン戦争に関しても自分の過ちを認めました。ですから、ロシアの指導部自身が、チェチェン戦争について自らにも非があることを認めているのです。ロシア側に必要なのは自らの過ちを認める勇気だと思います。私はプーチン大統領は自分がチェチェン国民に対して本当はどういうことをしなくてはならないのか、ということを理解していると思っています。他に解決法などないと確信します。

個人的なことですが、どこで生まれ、どんな教育を受けられたのですか？

我々の父方の祖先は、グルジアとの国境に近い高山地帯、今の行政区画で言うとイトゥム・カレ地区の出身です。そのジユムソイ村、この村は今でも激しい戦闘が頻発していることで、すっかり有名になってしまった村です。私たちの祖先の一人に、25年間戦ったイマム・シャミーリの後をついで自由への戦いを指導した人物、ウマ・ドゥーエフがいます。無論、彼もまた敗北し、1878年に、息子の一人ダダと二人一緒にロストフで絞首刑になりました。19世紀末の遠い祖先の話ですが。

私は、カザフスタンで、1951年に生まれました。そして、チェチェン・イングーシ共和国が復活することになった1957年に、両親はチェチニアに戻りました。私はグローズヌイで中学校を卒業し、グローズヌイ石油大学に学びました。今年はその卒業30周年なので、私たちは同窓会を行おうと計画しています。ということで、私は石油技術者なのです。20数年間、西部カザフスタンの油井地帯で働いてきました。

私のこれまでの生涯の中で一番良い思い出と言ったら、それはグローズヌイ石油大学で学んだ学生時代です。そこで職業的知識を習得すると同時に自分の世界観というものが形成されました。それこそ、ソ連全体から、この大学に学生が学びに集まっていたし、私たちも、チェチェン国内だけでなく、シベリアやトルクメニスタンとか、およそソ連の石油の出るあらゆる地域に実習に出かけました。当時は、学生建設隊というものが組織されていました。授業の無い休暇には、それこそソ連全体を旅して回りました。学生も、チェチェンや近隣のグルジア、アルメニアなどのみならず、ソ連全土からやってきていました。グローズヌイ石油大学は創立85年になる由緒ある大学で、ソ連における最高の石油採掘技術に関する高等教育施設でした。ですから、卒業生は旧ソ連全域の石油企業にいます。サハリンのオハの油田に赴任することになった学生もいて、この分だと日本に就職できるようになるかもしれないね、などと冗談を言い合ったものです。事実、我が卒業生は、ソ連国内はもとより、世界中の石油採掘現場に赴いています。また外国からの留学生も沢山受け入れていました。

このカザフスタンでの石油生産というものの、1960-70年代に我々の手で始められたものなのです。自分と同世代のカザフ人の石油技術者の同僚たちにもグローズヌイ石油大学の出身者が沢山います。我々は、彼らと今でも友だちづきあいを続けています。そんなわけで、私が一番無念に思ったのは、1995年にグローズヌイに行ったとき、私たちの大学が戦争で爆撃されて廃墟となってしまったのを見た時でした。確かに私のグローズヌイにあった家も爆撃されましたし、親族に死んだものも出ました。こういうことも悲しみですが、我々の大学を爆撃したのは、あまりに酷い話です。我々は自分たちの大学を愛し、誇りに思っています。

私は、ソビエト人、ソ連のと言う話をして、話題を複雑化したくはありません。まず我々は一人一人が人間であり、専門家です。専門家のメンタリティーは、全世界共通です。専門家は、どのような社会体制下で生き、仕事するかにより頓着しません。ソ連のシステムにだって良い点はありましたし。多くの国々の統合というのは他にも例が沢山ありますし、それ自体が悪いのではなく、ソ連というシステムが独裁国家となっていたことに問題があったと思います。当初は、チェチェン人は、ソ連をもっとまともなものだと思って歓迎したのです。ソビエト体制は帝政を解体しようとしたから。しかし、そのソ連がチェチェン人をカザフスタンに強制移住させ、その結果多くの人命が失われました。それで今回の国際会議は強制移住60周年を記念する催しとなりました。あなたの方のカメラマンが来て撮っていかれたし、ソンさんもいられたので、これについて詳しく説明するまでも無いでしょう。もう一度言っておきたいのですが、チェチェン人には独自の国家が必要なのです。

貴方のご家族のことについて聞かせてください。

私の家内も、チェチェン人です。ですから、子どもたちもチェチェン人です。子どもは3人、息子1人に、娘2人です。末の娘が、今日学校で試験を受けていますが、上の二人は既にカザフスタンの大学を卒業しています。息子は法学を、娘は外国語を学びました。娘はそれで、アメリカの人権団体、フリーダムハウスの事務所で働いており、アメリカに研修に行ったこともあります。チェチェン人が大家族を作る割には、私のところは小ぶりです。もっとも兄弟とか親子とか親戚まで広げればかなりの人数になります。

大部分は、まだグローズヌイに住んでいます。両親も既に他界しましたがグローズヌイに住んでいました。まだ住んでいるのは6人兄弟と3人の姉妹の家族たちです。両親の暮らしは苦しかったけれど、子どもたちは沢山いました。これは、ちゃんと成長できた者たちで、他に直ぐ亡くなった赤ん坊が4人生まれています。まあ、両親はとても健康だったってことでしょうね、アッラーの思召しに従って生きておりました。それと比べると私は息子1人に、娘2人で誇れたものではありません。

私が最年長で、他の兄弟姉妹は皆、私より年若です。ですから、一族の問題と言うと私に責任がかかってきます。ですから私はその責務を果たしていますが、でもみんな自立した人々ですからそれほどの負担ではありません。みんな互いに仲良くやっています。尊敬し合い、助言もし合っています。

両親が1957年にチェチェンに戻ったとき、山の中の故郷に戻ることが許されず、仕方なくサマシキ村に落ち着きました。あのアチホイ・マルタン地区のスンジャ川の岸边にある第1次チェチェン戦争初期以来、2度も大虐殺のあった村です。ですから、両親の墓はサマシキ村にあります。一族の多くの者の墓がサマシキにあるのです。ただもっと前の世代のものたちの墓は、山の中のジウムソイ村にあります。どうしてそんなことになったかと言うと、山岳民には、57年に直ぐに故郷の山の中に戻ることが許されなかったのです。これも強制移住の結果です。それでしかたなく平野部に住むことになったのです。そして1961年に父はグローズヌイに引越しました。以来43年間家族はグローズヌイで暮らしています。私はグローズヌイからカザフスタンにやって来た人間です。

お墓はどうなっていますか？

大変いい質問をしてくださいました。我われはムスリムです。我われの理解するところでは、我われはどこで弔いを行い、埋葬しても、ムスリムはアッラーの御許に行くということです。必要なことはイスラムの教えに従って正しく埋葬を行うことなのです。そうすれば、弔うものの願いは神に届くのです。近親者の墓がどこにあるかということはとても大切なことではありますが、一番大切なことは死んだ者の思い出が、残された者たちの心に残っている事なのだと思います。ですから私たちは亡くなっていった人々のことを出来る限り忘れまいと努めます。ですから私たちはどこに身をおこうと、神に対して亡くなった者への加護と、生きているものを正しく導いてくださるよう祈りをささげるのです。私は、サウジアラビアのメッカとメディナにお参りをしてハジとなりました。カーバ神殿において祈るお祈りは尊く、全て聞き届けられるものとされています。どこに葬っても彼らの魂は我われと共にあると思います。イスラムの教えでは、人が死んだらそこに葬れとも教えています。その教えに従えば、必ずしも一族の墓のあるジウムソイ村に墓が無くても良いのだと思います。

祖国について

私はチェチェン人です。ですからチェチニアは、私の想いであり、哀しみであり、夢でもあります。希望と言っても良い。でも、私は生身の人間で、カザフスタンで生まれ、カザフスタンで仕事を続け、今もカザフスタンで暮らしています。子どもたちもカザフスタンで生まれ、カザフスタンで教育を受けました。そして私は、カザフスタン共和国陸軍の将校でもあります。ですから私は、この国に忠誠を誓う義務を負っています。ですから、この国もまた自分の祖国なのです。強制移住を経験した諸民族は二つの祖国を持つことになったのです。自分たちの暮らしているこの国と、祖先たちが暮らしてきた国の二つが祖国なのです。よく我われはこういうことを口にします。「我われには二つの祖国があるカザフスタンとチェチニアだと」

人が評価されるとき一番大切なのは何ですか？

一つは先ず、年齢です。二つ目は智慧です。その人の精神的な豊かさです。ですから、年長者の豊かな見識が高く評価されるのです。いかなる局面においても的確な判断のできる年長の人物が尊敬されます。ちょっと昔話をいたしましょう。昔、チェチニアに6人兄弟がいました。長男はちょっと頭が弱く、自分で自分を傷つけてしまうようなこともありました。そのことは他の兄弟は良く知っていました。でも、問題が起こると、いつも5人兄弟は集まって、兄貴と相談しようということになりました。無論、自分たちでもこうしようという結論は出しているのですが、最終的には兄に決めてもらおうと兄を立てていました。兄の決定であると言うことが、彼らにとってはとても大切だったのです。まあ、これは例え話なのですが。そして精神面での指導者、宗教家の役割と言うものがチェチェン社会では非常に重視されます。彼らに関しては、年齢は無関係です。現在、カザフスタンには、二人の若いイマムがいますが、彼らはいずれも大変尊敬されています。また男性社会と言っても、母とか、姉とか非常に女性も敬われています。ですから、チェチェン人の間には血讐という慣習がありますが、例えば一族の男性が殺されたら、殺した者か、その一族の男性1人を殺すという慣習ですが、もしも女性を殺されたら、その時には、相手の一族の男性、2人を殺さねばなりませんでした。

あなたの一族の間でも血讐はあったのですか？

女性がと言うことはありませんでしたが、普通の血讐はありました。まあ、それから血讐を実行しないで和解すると言うやり方もあったのです。このことは、現在のチェチェン社会では非常にアクチュアルな問題だと思っています。と言うのは、余りにも多くの血がチェチェン人同士の間で流されているからです。例えば、兄弟の1人が殺されて、相手に血の復讐を実行すれば、社会は彼らを称えますが、もし復讐を果たさず、相手を許す場合、それはもっと高く評価されました。人命を尊ぶということは、大切にされているのです。

チェチェン人は人が良いというか、気持ちが軽いと言うか、あまり長いこと恨んだりせず、怒りを忘れ、許すことの出来る民族です。ですから、仲直りの手を差し出すことの出来る民族なのです。チェチェン側は和平の提案をしてきています。何とかロシア人とも仲直りしたいものです。チェチェン人の間には、妻がロシア人というケースはかなり多いのです。そして我われはこうして皆さんと、ロシア語で話し合っています。ロシア語で高等教育を受けましたし、ロシア語の本を読み、ロシア語の歌も歌ってきたのです。ですから我われはロシア文化の共有者でもあるのです。だから問題になるのは、我われがチェチェン人であることが認められるのかどうかということなのです。認められさえすれば、我われは如何なる民族とも友好的になれるのです。もう一度繰り返しますが、我われチェチェン人は、これまで常にチェチニアの内部で、自分の土地を守ろうと戦ってきたわけで、国の外で戦いをするということは無かったと言うことです。自分たちを守る戦いしかしてこなかったと言うことを誇りにしています。どんな風に守っているかと言うことは、皆さんの方が良くご存知ではと思います。

祖国の分断について

ロシア側の指導部の中にも、チェチェンの南北分割で手を打とうと言う考えが存在しています。幾つかある和平案の一つでもあるのですが、これはチェチェン人に受け入れられるものではありません。私は一つの民族は、一つの国家を形成すべきだと思っています。ですから朝鮮も分断国家としてでなく南北が一つの国家となるべきでしょう。どの民族も一つの国家を持つべきで、その後に国家の統合とか連合は考えられるべきだと思うのです。民族が一つにまとまらず分かれた状態になると、必ず外部でそれを利用しようと言う勢力が現れます。朝鮮の場合それは、アメリカとソ連でした。38度線は解消され、朝鮮民族は統一されるべきです。統一された朝鮮は、日本と遜色の無い素晴らしい国になるでしょう。まあそれは、朝鮮人自身が決めるべきことですが、

チェチェン人に起こっていることは、他の民族に過去に起こったことと何ら変わるものではありません。ただチェチェン人は激しく抵抗しているというだけです。そして、マスハードフ陣営とカディロフ陣営と二つに国土自体は分断されていませんが、人々の心のうちを分裂させられました。しかしそれはまだ全体とはなっておらず、分裂・分断はうまくいかないでしょう。チェチェン人は現実主義者ですから、犯罪者集団なんかならいざしらず、そのような流れには乗りません。貴女も日本に住む韓国人として色々問題を抱えていられるのだと良く判りました。ところで、私は一番素晴らしい朝鮮系の人々はカザフスタンに暮らす高麗人だと思うんですよ。私たちはここに住む高麗人たちと非常に良好な協力関係にあります。私の知ってる例では高麗人女性でチェチェン人のところへ嫁入りした例も知っています。彼女はわれわれの日曜学校で一生懸命チェチェン語を勉強しています。彼らの子どもたちは素晴らしい子どもです。また1999年にチェチニアからの難民がわが国に流入してきたとき最初に支援の手を差し伸べてくれたのは、カザフスタン高麗人協会に加わっている高麗人たちでした。

こうしてチェチニアとチェチェンディアスポラの問題に関心を持ってくださってうれしいです。日本や韓国がチェチェン問題を正しく理解してくださることは、我われにとって大変助けになります。我われの経験もあなた方の問題解決に有益であって欲しいと思います。

そういえば、日本とロシアの間には平和条約が締結されていないのでしたね。ロシアとチェチェンの間では1997年にエリツィン、マスハードフの間で平和条約が結ばれたのに、戦争が続いています。条約が無い国同士が平和で、平和条約があるこちらでは戦争、全く皮肉なことです。

お茶も出さずに話してしまっ。こういうのは、チェチェン人としては、まずいやり方なんです。今度自宅にでもおいでくださったら、家内がちゃんとおもてなしします。